

特別展 国宝・^{かきつばた}燕子花図屏風 デザインの日本美術

根津美術館（南青山） 24.04.13～05.12

「尾形光琳」（1658～1716）筆《燕子花図屏風》6曲1双 18世紀（江戸時代）



本作は、絵とデザインの境界線上に位置する作品で、群青（ぐんじょう）を分厚く塗った花や緑青（ろくしょう）を勢いよく刷いた葉など、画家の絵筆の介在は明らかであるが、平面上の幾何学的なレイアウトが作品の核心であるのも間違いない。

「国宝」である本作品のデザイン性や装飾性は、日本の美術が古くから来内包してきたもので、日本での工芸品の意匠と絵画の親密関係が特筆される。

本作は草花図でありながら「和歌」や「物語」とも関わると考えられているが、それはデザインによって文学世界を象徴的に表しているとも言える。

総金地に咲き誇る「カキツバタ」の群生は、『伊勢物語』第9弾「東下り」の八橋の場面に着想を得つつ、裕福な注文主を想定させる高品質な絵具をふんだんに用い、かつ現代のグラフィックデザインを先駆けるものである。

右隻部分の花には群青（ぐんじょう）、葉には緑青（ろくしょう）が輪郭線を隠すように塗られていて、背後の金箔に映えて美しくかつ豪華である。

本展では、本作品を中心に近世の作品を主にとり上げながら、デザインの観点から日本の美術を見つめている。

《扇面歌意画卷》（部分）



1巻 紙本着色 17世紀（江戸時代）

和歌とその歌の内容を描いた扇型の絵を集めた「扇の草子」と総称される作品の一つで、機智的に表わされた絵から和歌を判じる「歌絵」の伝統を継ぐのは、《燕子花図屏風》の制作と鑑賞にも通じるものである。

他の展示作品としては、

《尾形切（業平集断簡）》（部分）藤原公任筆

12世紀（平安時代）

《桜芥子図襖》4面 紙本金地着色

17世紀（江戸時代）

などが展示されている。